文　楽　に　つ　い　て

44期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

何気なく新聞を読んでいたとき、ふと目に入ったのが文楽に関する記事でした。興味は持ちながらも、普段接することがあまりなかった日本の伝統芸能。この自由研究を機に、ひとつ日本の文化に近づけたらと思い、このテーマを設定しました。

Ⅱ　研究方法

(1)　文楽鑑賞　　まず、文楽とはどういうものかを知る。
(2)　文献調査　　歴史や人形の仕組みなどを詳しく調べる。
(3)　アンケート1　　附中生・教官を対象とし、文楽の知名度をはかる。
　　〃　　2　　文楽劇場の方々を対象とし、違った角度からの文楽を見つめる。

Ⅲ　研究内容

1　文楽の歴史

「文楽」という言葉は19世紀に生まれたもので、それまでは「人形浄瑠璃」または「操り浄瑠璃」などと呼ばれていた。そこで、「浄瑠璃」の歴史について調べてみた。

(1)　語り物から人形浄瑠璃へ

日本に古くからある声楽は〝歌い物〟と〝語り物〟に分けられる。

〝歌い物〟とはメロディ、テンポ、リズムに重点をおいた長唄、小唄などで、〝語り物〟とはその歌詞の内容の伝達を最優先する平曲、浄瑠璃などである。

語り物は物語りに節をつけて語ってきかせるもので、平曲からはじまったとされている。平曲は鎌倉時代、上流階級の人々の間で流行したが、やがて琵琶法師らは庶民を対象とするようになり、同時に平家物語以外も手がけるようになった。その中で圧倒的に人気を集めたのが、「浄瑠

▼年表1　浄瑠璃300年の歩み　～1～

世紀	年号	西暦		できごと
17	貞享元	1684	古代浄瑠璃時代	◦竹本義太夫、道頓堀に竹本座創設
	2	1685		◦近松門左衛門作「出世景清」上演 ―これ以前を古浄瑠璃時代と呼ぶ
	元禄16	1703	近松・海音の時代	◦近松門左衛門作「曽根崎心中」上演 ―世話浄瑠璃の発生 ◦豊竹若太夫、道頓堀に豊竹座創設 ―竹豊二座対抗時代始まる
18	宝永			
	正徳			
	享保9	1724	竹豊二座	◦近松門左衛門没
	19	1734		◦竹本座「芦屋道満大内鑑」で三人遣いを始める

璃」だったのである。

浄瑠璃は室町中期につくられたものと考えられ、この名称は『浄瑠璃姫十二段草子』から出たものである。これは浄瑠璃姫と牛若丸との恋愛をテーマにした語り物で、この『十二段草子』の曲節がもてはやされたため、浄瑠璃姫以外の内容でもその節曲しを〝浄瑠璃節〟と呼ぶようになったのである。16世紀中頃に琉球から三絃が伝わると、それを改良した三味線を浄瑠璃の伴奏楽器として用いるようにもなった。

浄瑠璃を人形劇の地に使う人形浄瑠璃がはじまったのは16世紀末頃だとされている。

もともと京を中心とした上方で起こった浄瑠璃は江戸にも移され、江戸中期にさしかかるころには数十に及ぶ流派が生まれた。それらの中で各派の長所をとり入れ表現を多彩にした竹本義太夫の義太夫節は大変な人気を集めた。義太夫は貞享元（1684）年に大阪道頓堀に竹本座を創設し、近松門左衛門の作品を専ら上演した。これ以後、他の各派は衰え、浄瑠璃といえば義太夫節を意味するほどになった。

(2) 竹豊（ちくほう）時代

元禄16（1703）年、義太夫の弟子の竹本采女が豊竹若太夫と改名し、竹本座の東、同じ道頓堀に豊竹座を開いた。紀海音（きのかいおん）を座付き作者に据え、豊竹座は竹本座に対抗する一大勢力となった。こうして、人形の心理描写を重んずる地味で重厚な芸風（西風）の竹本座と派手で技巧的（東風）な豊竹座との人形浄瑠璃の全盛期が幕開いた。これらの芸風が以後、義太夫節の基調

▼年表2　浄瑠璃300年のあゆみ ～2～

18	元文		対抗時代	
	寛保 2	1742		◦紀海音没
	延享 2	1745	全盛期	◦人形浄瑠璃全盛期 「操り段々流行して歌舞伎は無が如し」
	寛延			
	宝暦			
	明和 2	1765		◦豊竹座退転
	4	1767		◦竹本座退転
	安永			
	天明			
	寛政			
19	享和		◦義太夫節の古典化 ◦人形の技巧の発達	
	文化 初頭			◦植村文楽軒が高津新地に芝居小屋を開く
	8	1811		◦文楽軒の芝居が稲荷境内に移る —— 稲荷芝居の開始 稲荷、座摩、御霊の宮地芝居が主流を占める
	文政			
	天保 13	1842		◦天保の改革により宮地芝居が禁じられる
	弘化		文楽の芝居の隆盛	
	嘉永			
	安政 3	1856		◦文楽軒の芝居が稲荷社内に復活
	万延			
	文久			
	元治			
	慶応			
	明治 5	1872	(文楽座)	◦稲荷境内の文楽軒芝居は松島に移り、文楽座と改称
	17	1884		◦彦六座が開場 —— 文楽・彦六対抗時代 ◦松島文楽座は御霊に移る
20	大正 15	1926	御霊	◦御霊文楽座焼失
	昭和 5	1936	弁天座仮興行	◦四ツ橋文楽座開場
	20	1945		◦四ツ橋文楽座戦災により焼失
	21	1946		◦四ツ橋文楽座再開場
	24	1949		◦文楽座は「三和会」と「因会」に分裂
	31	1956		◦道頓堀文楽座開場

となった。

人形浄瑠璃の興隆が絶頂に達したのは延享3（1746）年から寛延元（1748）年の三年間であった。しかし、やがて人形浄瑠璃は衰微の道をたどりはじめ、明和2（1765）年には豊竹座が廃座し、竹本座も2年後に廃座となった。

▼年表3　浄瑠璃300年の歩み ～3～

20	38	1963	道頓堀		◦「因会」「三和会」合同して財団法人文楽協会設立
	41	1966		朝日座	◦国立劇場開場（東京）
	59	1984	日本橋	国立文楽劇場	◦国立文楽劇場開場（大阪）

以後、人形浄瑠璃は社寺の境内や小さな席で興行を続けるようになるが、技術の面では名人が次々に出、先人の芸に工夫を加え、磨き上げていった。

(3) 人形浄瑠璃の再興

竹豊両座がなくなってから衰える一方だった浄瑠璃だったが、文化年間（19世紀初頭）に大阪の高津近くに人形浄瑠璃の小屋が開かれた。小屋主は植村文楽軒。彼の名が現在の「文楽」の由来となったのである。文化8（1810）年には稲荷神社境内に進出し、明治5（1872）年に松島に移ってから〝文楽座〟と名付けた。その後明治17（1884）年に、文楽座を脱退した人達が稲荷境内に〝彦六座〟を開いた。そこで、文楽座も御霊神社の境内に移り、両座の対抗により第2の全盛期とでもいうべき時代を現出した。しかし彦六座は明治26（1893）年秋に解散してしまった。

こうして、御霊文楽座は人形浄瑠璃界に残り、「文楽」が人形浄瑠璃の代名詞となった。

明治42（1909）年、〝文楽〟の行興権は松竹に移り、御霊文楽座は大正15（1926）年焼失し、昭和5（1930）年に四ツ橋に新文楽座が開かれた。

(4) 昭和の文楽史

第2次大戦の後、戦火を受けた劇場の中でまっ先に再興したのが四ツ橋文楽座であった。しかし、戦後の民主化に伴う労働の波がおしよせ、技工員の組合結成について賛否両派が対立し、ついに組合派の三和（みつわ）会と非組合派の因（ちなみ）会に分かれてしまった。が、両派とも昭和30（1955）年には国の重要無形文化財として総合指定を受けた。昭和31（1956）年には道頓堀に文楽座（後の朝日座）が開場したが不振を極め、昭和38（1963）年に行興権は文楽協会の手に移った。この文楽協会をはじめ、大阪府、大阪市、財界が大阪に文楽のための国立劇場を作ることを要望。昭和59（1984）年4月、国立文楽劇場が開場し、現在に至っているのである。

2　人形について

文楽の人形は、首（かしら）・胴・手・足の4つの部分から成る。この4つの部分を組み合わせ、糸でつないで骨組となし、これに衣裳を着せるのである。

(1) 胴と肩板

胴は普通のものは切胴で肩板と胴輪で構成され、肩板には手をつける糸と、胴内を通って足を吊す糸がある。肩板の真中は四角に切り抜かれていて、その穴に肩車が四隅の糸によって吊されている。

この肩車は上下前後に動くようになっている。この穴に首をさしこみ、小ざるで止めてあるので首を動かすとき、この肩車が動くのに従って首が柔軟に動くようになっている。この肩板を動かすことによって首が上下し、また胸が動くので、女形の呼吸のさまなどの微妙な動きが表現できる。

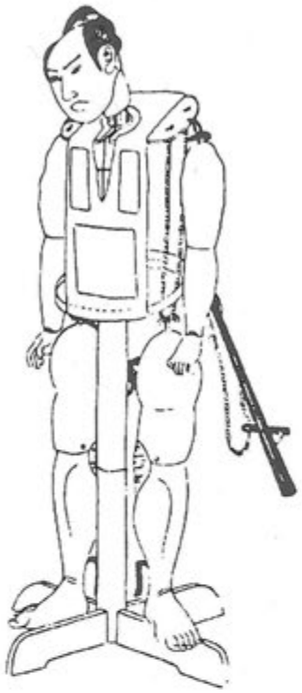
特殊な胴としては丸胴がある。丸胴は肌ぬぎとなったり、裸になって体をあらわす場合に用いられるもので、綿入りの肉のついたものである。

(2) 首

文楽の首は、それ自体でも芸術的作品であるが、本当の首の生命は、それを遣ってみて初めて生きるかどうかにある。

首はまず大きくみて、男女の別と、善悪の別に分けられ、さらに人物の年令、性格によって、およそ立役、荒物、二枚目、三枚目、敵役、老役の六種の典型ができあがっている。

首はさらに、戯曲の進展にしたがって新しい性格をあらわす首が生まれ、その眉、口、目、鼻の部分を少し変化させ、髪型を変えて応用していくこととなる。



▲図1　人形のしくみ

◦男の首

善役…文七、検非違使、源太、孔明、若男、白太夫、若男、鬼若、鬼一、舅、正宗、丁稚、定之進、平作、又平、豹船、上人、斧右衛門

悪人…陀羅助、公時、虎王

ちゃり役…三枚目、鼻動き、蟹

善悪兼役…団七、内匠、与勘平、大舅、端役、つめ

◦女の首

善役…娘、老女形、新造、傾城、お福、婆

悪役…莫邪、八汐、悪婆

妖怪…がぶ

善悪兼役…つめ

◦特殊首

男…三番叟、般若丸、丞相、清玄、沢市、舅のがぶ、景清、座頭、梨割

女…亀笹、妙林、お岩、両面

妖怪…鬼、孫悟空、猪八戒、般若

▲図2　検非違使(上)と娘(下)

(3) 手

手は首についで、その表現に重大なウエートがかかっている。初期のころにはなく、次に人間の手が代用し、のちに手がつくという順序で発達し、ことに三人遣いになってからは左手遣いという専門家が出現するようになった。その手はさらに、扮する人物によってその動きを発達させ、基本的な9種のほかに、特殊なものが24種ある。手は人形の顔の表情を特に助けるもので、手の動かし方、置き方によって泣くこと、怒ること、笑うこと、安心すること、心配することを表現する。女性は手先の動かし方で細やかな表情を、男性は腕の動かし方、張り方によって性格や感情を表出する。

◦普通の手

かきつばた、かずのこ、かせ手、もみじ手、つかみ手、若男の手、たこつかみ、婆手、子供手

◦特殊手

三味線手、琵琶手、筆手、琴手、尺八手、碁石手、梅の手、扇手、懐剣手、羯鼓手、中啓手、狐手、景清手、数珠手、踊り手、三婦手、忍術手、幽霊手、乱れ手、女たこつかみ、鬼手、弓手、舞手、薬手

▲図3　たこつかみ（図は右手）

(4) 足

足は、人形の首、手、足の三つの部分のうちでは最も遅れて発達しただけに、最後の段階でその機能が発揮されたものだと言ってよい。足によって安定性が保たれるため、この足遣いは難しい。昔は一生を足遣いで終った専門家があったという。足遣いはたんなる修業の段階ではなく、やはり足遣いの専門家あって初めて、一つの人形の動きが完成するのだといえる。

原則として女の人形には足は無く、すそを動かして足の動きを見せる。男の人形の足の動きにもつき足、まき足、きざみ足などがあって、手の動きと一緒になってかんぬき、六法、樋口などという型を構成する。

◦普通の足

文七、丸め、源太、きれもも、もも長、子供足、中足、女足、薬足

◦特殊足

景清足、狐足、能足

▲図4　中足

(5) 人形の遣い方

人形を遣うとき、中心になる人を主遣いという。主遣いは人形の背中から左手を差し込み、人形の首の部分につながる胴串という棒を握って、まっすぐに支える。そして胴串の引栓や仕掛け糸を左手の指で引き、眼を左右に動かしたり、まぶたを閉じたり、眉を上下させたり、口を開けたりさせる。さらに右手で人形の右手を遣う。左遣いは右手で人形の左手を遣う。足遣いは

うしろから中腰に構え、人形のかかとに付けられた足金をもって足の運びを操る。女の人形には原則として足がないので、衣装の裾の内側にある「ふき」を指ではさみ、いかにも歩いているかのように見せる。

主遣い・左遣い・足遣いの三人のイキがぴったり合ったとき、木と布で作られた人形が生身の人間以上に人間らしく、豊かな感性の発露を見せてくれる。

3　10代の文楽に対する認識

10代の文楽に対する知名度をはかるため、附中生全員にアンケートを取った。

(1)　「文楽」という言葉自体から受けるイメージ
(2)　文楽とはどのようなものか知っているか。
(3)　文楽を観に行きたいと思うか。
(4)　知っている文楽の作品名（選択制）

－結果－

(1)　マイナスイメージのことば
　　くだらない、かたくるしい、難しい、暗い、重い、古い、親しみがない
　　近づきにくい　など
　プラスイメージのことば
　　日本の伝統文化の象徴、美しい　など

(2)　知っている　27%　　知らない　73%
　　知っている人と答えた中でも、間違った認識をしている人も少しいた。

(3)　思う　29%　　思わない　71%
　　実際に観たことがある人は、全体の20%程度。

(4)

1位　曽根崎心中	2位　仮名手本忠臣蔵	3位　義経千本桜
4位　信州川中島合戦	5位　壇浦兜軍記（だんのうらかぶとぐんき）	6位　鎌倉三代記
7位　心中天網島（しんじゅうてんのあみじま）	8位　国性爺合戦（こくせんやがっせん）	9位　伊賀越道中双六（いがごえどうちゅうすごろく）
10位　平家女護島（へいけにょごのしま）	11位　ひらがな盛衰記	12位　絵本太功記
13位　恋女房染別手綱（こいにょうぼうそめわけたづな）	14位　艶姿女舞衣（はですがたおんなまいぎぬ）	15位　伊達娘恋緋鹿子（だてむすめこいのひがのこ）
16位　娘景清八島日記（むすめかげきよやしまにっき）	17位　卅三間堂棟由来（さんじゅうさんげんどうむなぎなのゆらい）	18位　桂川連理柵（かつらがわれんりのしがらみ）

－考察－

(1)　マイナスイメージの言葉が圧倒的に多かった。日本のものということで、マイナスイメージを受けるのだろう。しかし、そういうイメージを受けるのは、周りの環境にもよるのではないだろうか。現在の音楽教育では、小学校の頃から洋楽がほとんどで、邦楽に触れることはあまりない。このこともそのひとつであろう。

(2)　これは、文楽（イコール）＝人形浄瑠璃というのを知らない人が多いのだろう。昔は大衆文化であった文楽が、現在このような状態であることは、日本文化への関心が低くなってきていることを示すのであろう。

(3)　観たことがあるという人はいるが、興味のない人の方が多い。このことも、日本文化への関心が低くなってきていることを示すのであろう。

(4)　上位を占めるのは、歴史の授業などで取り扱うものである。アンケートを取ったころ、ポスター等に載っていた作品はあまり知られていない。このことは文楽への関心の低さを示しているといえるだろう。

4　裏からみた文楽

文楽を違った観点で見つめるため、国立文楽劇場（日本橋）の方々にアンケートを取った。アンケートに答えてくれた人は、吉田玉男さん、吉田和生さん、吉田玉一郎さん（以上、人形遣い）、竹本緑太夫さん（大夫）、鶴澤清友さん（三味線）、高橋さん（床山師）、石橋さん（衣裳部）。

(1)　貴方にとって文楽とはどういうものか。
(2)　貴方から見た文楽の魅力とは何か。
(3)　現在文楽が抱える問題とは何か。
(4)　これからの文楽はどうあるべきだと思うか。

－回答内容－

(1)　仕事・ひとつの職業…伝統のひとつという難しいという考えはしない。
　　生きがい…一生勉強していけるものである。

(2)　知れば知る程おもしろ味が出てくること。
　　人形遣い、大夫、三味線でやる三業一体の素晴しさ。
　　命のない人形に命をふきこむ不思議さ。

(3)　三味線の皮とバチ（象牙）の不足。
　　後継者の養成（量より質）、裏方の後継者の養成。
　　理解できる人が少ない。古い作品をいかに理解しもらえるようにするか。

(4)　若年者へのＰＲ。
　　現代にあったものもやるべき。
　　学校教育などで、幼年から邦楽に親しむべき。
　　お客さんに満足していただけるものを演じる。

Ⅳ　総括

アンケート結果で、文楽の知名度の低さに驚いたが、これは当然ではないだろうか。日常、文楽というものに触れる機会はめったになくどんなものかもわからないのである。わからなければ、興味もわかないのであろう。

学校教育で、もっと邦楽に触れる機会があれば日本の文化全体にも興味が湧くのではないだろうか。

７月に初めて文楽を観に行ったとき、形式ばったものではないかと思っていたが、実際は〝大阪〟という感じのリラックスした雰囲気で楽に鑑賞できた。人形の仕草に表れる、遣い手の心が何となくわかったような気がした。時折、ハッと目を奪われるような美しい仕草があり、これが〝人形が生きている〟ということなのかと納得してしまった。

初めて文楽というものに触れてみて、改めて日本文化というものは素晴しいと思った。文楽というものは、いわゆる人形劇であるが、人形の動きには人形を超えさらに人間以上のものがある。そんな文楽を、ぜひ一度観て欲しいと思う。

V　参考文献

- 郡司正勝ほか（1966） COLOUR COMPACT文楽　集英社　133p
- 国立文楽劇場事業課（1990） 文楽 鑑賞のために　日本芸術文化振興会　23p
- 権藤　芳一（1985） 文楽の世界　講談社　245p
- 高木　浩志（1973） 文楽入門　文藝春秋　233p
- 中西敬二郎（1980） 人形は生きている　板倉書房　211p
- 文楽協会（1976） 文楽の人形　婦人画報社　377p
- 森　晋六（1965） 文楽のみかた　創思社　424p
- 水落　潔（1989） 文楽 そのエンチクロペディ　新曜社　pp.207～251
- 宮尾しげを（1967） 図説 文楽人形　中林出版　472p
- 茂手木潔子（1988） 文楽－声と音と響き　音楽之友社　263p
- 山田　庄一（1990） 文楽　ぎょうせい　326p